

<http://home.kobe-u.com/kinki-sha/>

近畿学校保健学会通信

No.142

平成27年10月16日発行
近畿学校保健学会事務局
〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘3-11-1
関西福祉科学大学 大川研究室
TEL&FAX : 072-947-1307
Mail : kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp
振込口座 00940-5-181826

目 次

竹田斌郎先生を偲んで	 2
第62回近畿学校保健学会（平成27年度年次学会）報告	
1. 第62回近畿学校保健学会を終えて	 3
2. 一般講演座長報告	 4
3. 特別講演報告	 10
4. 教育講演報告	 10
5. 平成27年度近畿学校保健学会奨励賞	 10
6. 学会印象記	 10
平成27年度近畿学校保健学会奨励賞抄録	 13
平成27年度近畿学校保健学会評議員会・総会 報告	 14
平成27年度第1回近畿学校保健学会幹事会議事録	 16
平成26, 27年度幹事及び評議員名簿	 17
7. 平成27年度第1回選挙管理委員会議事録	 19
選挙に関するお願い	 19
8. 第4回研修セミナー	 20
編集後記	 20

会費納入のお願い

来年2月に役員選挙があります。選挙権の有資格者は平成27年度の会費を納入した方で、被選挙権の有資格者は平成25～27度の会費を納入した方となっております。今年度の会費が未納の先生におかれましては、必ず12月末までに会費を納入していただきますようお願い致します。

竹田斌郎先生のご逝去を悼む

本学会の名誉会員竹田斌郎先生(享年 90 歳)が、平成 26 年 10 月 9 日に安らかに御帰神なさいました。ご指名を戴きましたので一文を添えさせて戴きます。

■人柄■ 人間愛に満ちた、近年稀にみる肚のすわった本当の“豪傑”でした。夜中に往診を乞われても、お金が無い人が来られても、喜んで診療されたり、元ヤクザだった人を諭し、按摩さんとして働く場を提供し、見事に厚生された方の事を思い出します。“病気治し”ではなく、“人直し”を大事にされ、“人育て”に尽くされ、この生き様は学校保健にも一貫しておられました。

■生家■ 日本医学史上極めて重要な医系と言われる竹田家（防長医学誌）で、鍼灸のツボを模写した国宝の銅人形(東京国立博物館)の、その原型となった銅人形を永和 4（1378）年に明（現中国）から持ち帰ったのが竹田昌慶というご先祖だったそうです。

■エピソード■

□不良姿勢と操体法：一早く不良姿勢対策に取り組み、その改善策として操体法を導入して下さり、その成果を昭和 62 年度日本学校保健学会で発表する事もできました。竹田先生とのご縁は、操体法の提唱者橋本敬三師のご紹介によるものでした。

□奈良市の学校保健活動の育ての親：奈良市学校保健会の発足に伴い、その会長に推された時“私は支援する立場です！学校現場を知った先生にお願いしましょう！”と辞退され、裏方に徹せられた。その裏方のお姿に心打たれた理解者が、しばしば深夜まで作業をしておられた姿を思い出します。

□徳があればこそ：学校の先生と行政の方が資料提供をし、毎年『奈良市学校保健要覧』1冊にまとめ発行しておられました。その編集を黙々と明け方までされ、裏方に徹しておられる竹田先生のお姿に接し、そのまた裏方として一緒に手伝っておられた中村房代・幸雄様ご夫妻の姿が目につかびます。偏に竹田先生の徳があつてのことだと思います。

竹田先生のご冥福を、皆様と共に祈り申し上げたいと思います。

(近畿学校保健学会評議員・奈良市薬剤師会顧問 北村翰男)

第 62 回近畿学校保健会（平成 27 年度年次学会）報告

1. 第 62 回近畿学校保健学会を終えて

学会長 高橋 裕子
（奈良女子大学）

第 62 回近畿学校保健学会は、「伝えること、伝わること」をメインテーマとして、平成 27 年 6 月 27 日に奈良女子大学において開催いたしました。280 名のご参加をいただき、無事に終了することができました。これもひとえに会員の皆様のご支援とご協力の賜物と感謝申し上げます。

午前中は、一般演題 31 題を 4 会場に分かれてご発表いただきました。各会場とも興味深い発表がなされ、質疑応答も活発にされました。

ランチョンセミナーは「禁煙を通してみた伝えることと伝わること」を高橋がレクチャーさせていただきました。

午後は長年にわたり NHK の看板番組「ためしてガッテン」を作り続けてこられた北折一先生に、特別講演「伝えることと伝わること～伝えることと、伝わること～ガッテン流・行動変容につながるプレゼン術～」を、さらに特別講演「世界で一番聞きたい保健指導&健康教育論」を岡崎好秀先生に講演いただきました。学校現場では伝えることがたいへんに重要な役割を果たします。しかし、正しく伝えつつも、必ずしも正しく伝わっていないことも同時に実感することの多い場です。正確に伝えようと日々つとめている私たちの熱意は、そのとおりに伝わっているのか？内容は伝わっているのか？そもそも伝えたいと思っている内容は、適切なのか？などの疑問に対して、二人のエキスパートの先生方から「伝える」ことと「伝わる」ことのギャップやそれを乗り越える現場ですぐに役立つノウハウを学ばせていただきました。

閉会にあたり、近畿学校保健学会奨励賞 1 名の方を表彰いたしました。今後も多くの若い会員の方々が研究の成果を近畿学校保健学会でご発表されることを期待し、感謝を添えてご報告いたします。



2. 一般演題座長報告

第1会場

<大学 他>

座長 辻井啓之（奈良教育大学）

1-1 色覚異常の児童生徒に対する教育的配慮に関する学生の意識の推移（楠本久美子）

平成15年度以降、全国ほとんどの学校で色覚検査が実施されなくなった。平成16年度入学生から色覚検査を受けた学生が減少し、平成16~23年度入学生は、「色の見え方に違いがあること」についての知識が極端に少なく、「配色に対する配慮」「学校での色覚検査」の必要性についての意識も低いという結果がみられている。

「配色で日常生活に困る人がいる」ことは平成24~27年度入学の男子学生は全員が知っており、色覚異常に関する教育は、このような不均一が生じないように、きちんと行う必要があることが示された。

1-2 大学生が感じるテレビゲーム内の暴力性について（竹端佑介 他）

少年犯罪が近年凶悪化しているという印象は、マスコミのセンセーショナルな報道などを要因として否めないところであるが、実際の統計上著明に増加しているとは言えない。ただ、テレビやインターネット、また仮想現実を伴うテレビゲームにおける暴力映像が青少年に与える影響は否定できず、多くの関連研究が存在する。テレビゲームがネットゲームに進化した現在、大学生がコミュニケーションツール、ストレスマネジメントに利用している現状が報告されたが、特に低年齢層に対する影響に関しては継続した研究・考察が不可欠と思われる。

1-3 大学卒業後のレジャー活動の実際—QOLを高めるより良い余暇の過ごし方—

（玉井久美代 他）

社会人になって間もない大学卒業生にとって、経済的、社会的に、十分にレジャー活動を行う余裕はなく、余暇活動への参加人口は減りつつある。一方、質の高い余暇を過ごす時間は充実した

生活を構築するために有用なことが認められている。大学在学中に積極的にレジャー活動に参加していた者は、卒業後も比較的レジャー活動を継続する傾向があることが報告された。初等・中等・高等教育を通じて、ライフスタイルの変化に応じて、レジャー活動をストレスマネジメントに応用する能力を涵養する教育が必要であることが考えられた。

1-4 養護実習の現状と課題—養護教諭アンケート調査から—（高田恵美子）

平成26年1月の奈良県における養護教諭研修会でのアンケート調査結果よりの考察である。養護教諭実習時期は、指導経験者は5月が適切と考えていた。実習計画作成者は96.2%が養護教諭であり、実習内容としては、救急処置、健康診断、救急体制、学校保健計画、健康相談の順に多かった。短期間で必要十分に職務内容を指導することは困難で、実習生は継続的な学びが必要であるが、実習内容のばらつきも多く指導側の悩みも深い。養護教諭実習のあり方は、さらなる実態の把握と、具体的な実習マニュアルを作成する必要性が示唆された。

<睡眠>

座長 後和美朝（大阪国際大学）

1-5 養護教諭養成コースの学生の養護教諭の職務に関する意識の特徴（久保昌子）

養護教諭を志望する学生の養護教諭の職務に関する意識の特徴についてアンケート調査により明らかにした研究である。養護教諭を志望する学生は一般学生に比べて保健室の利用頻度が高く、またその理由も心身の相談が多く、養護教諭の職務全般に対する理解が深いことを明らかにしていた。今後は一般学生についても養護教諭の職務の重要性や連携の必要性等について理解を深める方策等についての検討を期待したい。

1-6 BMIを活用した保健指導のあり方について（五十嵐裕子 他）

著者らが作成したBMI評価チャートによって思春期の子どもたちの誤った体重抑制を容易に

発見することができたことから、これらのチャートを用いて体重抑制を予防するための保健指導のあり方について検討した研究である。成人後のBMIの実測値が中学校1年時点の予測値から大きく外れるケースのほとんどが「やせ」になっていたことから、中学校や高校における健康教育ではBMIを活用して身体発育の理解を深める必要性を指摘し、今後の継続研究が期待される。

1-7 暴力を見て育つ子供への影響と養護教諭の支援のあり方（阿古知世）

面前DVを経験した子供を受け持った経験のある2名の養護教諭に対して半構造化面接法により面前DVを受けた子供の心身の状況や支援のあり方について検討した研究である。このような経験を持つ子供は自尊感情が低く、特定の友人を持たない等の特徴があり、また暴言や暴力に萎縮してしまう半面、問題解決方法に暴力を用いたり、暴力が表現方法の一つになっているとの報告がなされた。また、心理教育援助の中心的存在である養護教諭のコーディネーターとしての力量も必要であることが指摘された。

1-8 経験年数の少ない小学校教員における職務ストレスとストレス反応の関連（遠藤 朝 他）

教員歴が10年までの小学校教員を対象に、職業性ストレス簡易調査票を用いてストレス状態とその要因やサポートについて検討した研究である。正式採用までの経験年数を含め、新人教員（3年未満）では不安感、疲労感、抑うつ感等の心理的ストレスの訴えが強い傾向にあり、若手教員（3年以上）では仕事の適正度や質的負担感がストレスを強める要因となっていることを明らかにした。今後はこのような調査結果を踏まえて、経験年数に応じたストレスの解消方法や対処法等に関する継続研究が期待される。

第2会場

<思春期 他>

座長 笠次良爾（奈良教育大学）

2-1 小児を対象とした遺伝子解析の意義

（藤原 寛 他）

大学病院肥満外来を受診している7歳から18歳の児童29例を対象として、肥満や糖尿病に関連する $\beta 3$ アドレナリン受容体遺伝子、脱共役タンパク1遺伝子プロモータ、2型脱ヨード酵素を解析した。スポーツを定期的実施するものは1名だけで、その1名は柔道であり間食が多く、競技特性もあって肥満の改善を認めていない。他の症例は遺伝が基礎に有っても、肥満改善に関する親の意識が高いほど、肥満の改善度に良い影響を与える傾向を認め、保護者の意識の重要性が示唆された。

2-2 日本人における思春期の期間に関する secular trend について（白石龍生 他）

学校保健統計調査結果を1949年度から2012年度まで縦断的に解析し、1943年度生まれから1996年度生まれまでの54コホートの平均身長推移を男女別に把握し、take-off ageとPHV、FHAを求めたところ、take-offからFHAまでの期間すなわち思春期の期間は女子の方が男子に比べて有意に短く、PHVを基準に見ると女子は男子に比べ短期間でPHVに到達し、FHAまでの期間が男子よりも長くなるが、思春期期間の経年推移はわずかに短縮される傾向はあるものの、年齢との間に有意な相関関係は認めなかった。思春期期間の secular trend について着目した研究は過去になく、非常に興味深い結果である。

2-3 中学生における心理的ストレス症状と起立負荷時の自律神経活動との関連（青地由梨奈 他）

中学生189名（男子79名、女子110名）における心理的ストレス症状と起立負荷時の自律神経活動との関連について、岡安らの中学生用ストレス反応尺度（簡易版）と、自律神経解析用心拍計を用いて起立負荷試験時の心電図R-R間隔を連続記録し、LF/HF比とCCVHFを測定しその関連を調べたものである。その結果、心理的ストレス高値群はLF/HF比が低値を示し、起立負荷時の変化も遅延していた。これらの群は睡眠時間が短く、就寝時間が遅い、朝食欠食が多いという結果を伴っており、日常生活習慣との関連

も含めて興味深い結果であった。

2-4 学校における暴力防止教育と警察の役割 (松村歌子)

ドメスティック・バイオレンス (DV) は社会的問題となっていることを警察庁の統計から示し、その DV 家庭に育つ子供について発育発達に悪影響をもたらすことについて内閣府の「被害者の自立支援等に関する調査結果(2007)」で示すことで、学校における暴力防止教育と警察の役割について述べたものである。従来、交通安全教育や薬物乱用防止教育においては警察との連携が図られてきているが、現在の社会情勢を鑑みると、暴力防止教育においても連携の可能性が必要ではないかと主張されている。

<防災 他>

座長 藤原 寛 (京都府立医科大学)

2-5 子どもの防災対応能力とソーシャルキャピタルとの関連に関する文献学的研究

(道塚 彩 他)

地域防災を担うリーダーの育成や震災での教訓を次世代へ継承するために、子ども達の防災対応能力と災害時の自助・共助を支える要素としてのソーシャルキャピタル (SC) の関連性について文献的検討を行い報告された。防災と SC、災害文化と学校における災害教育、子どもの防災対応能力と SC に関する詳細な検討がなされた。震災をきっかけとして、SC の指標である人と人とのつながりは学校内外で支援の輪が広がりをみせたが、子供を対象とした防災と SC との関連づけた先行研究は皆無で、子どもの防災対応能力、SC について検討することがより発展的な防災教育に寄与すると結論づけられた。防災教育に関する文献数は震災以降急増したが、研究者の話題性を反映するものでしかない。本研究は、大変重要な観点からの研究であるが、主に震災関連の文献研究であり、今後の研究の方向性として他の災害における防災活動にも視点を向け、より多くの関連文献の検索を通して、子ども達への防災教育に有用な SC の発展的研究を期待します。

2-6 教員の印象に残る子どものケガから、子どもの障害予防に必要な要素を考える (笠次良爾)

学校園における傷害に関する研修会を受講した幼稚園から中学校、支援学校の教員を対象として、現場において「何でこんな怪我をするの？」という質問に対して、その回答をもとに「理解しがたいケガ」の種類やその発生要因から、障害予防につながる要因を検証して報告された。幼稚園では打撲と擦過傷、小学校は炎症、中学校は骨折が多くみられ、受傷部位は、幼稚園は顔面、中学校では上肢や体幹に多くみられた。傷害発生要因として、反応や変換などの調整力に該当するものが多いと報告があった。本研究は、「理解しがたいケガ」という、指導者が日常的に危惧しているリスクに焦点を当てた内容であり、今後の安全指導に新たな視点から有用な研究であると考えられる。最近の子ども達の行動を観察していると、より多くの不可解な傷害が発生することが予測されます。今後、本研究の知見をもとに傷害予防につながる指導者の心構えや具体的な要因とその方策を提示していただくことで、より有用な研究になるのではと考えています。

2-7 教員養成系大学生の防災意識

(井上文夫 他)

将来、教員を志望する教員養成系大学の学生を対象として、災害時における教員の役割の重要性を認識し、災害に対する意識や防災意識を向上させるための指導指針の一助として、災害に関する知識や日常的な安全意識や防災対策を調査した報告であった。自然災害への防災意識は約半数であったが、防災訓練や防災教育により防災意識は向上すると考えられていた。また、被災経験を有する学生は安全意識が高い傾向にあったが、ハザードマップの認知度は低く、信号無視や駆け込み乗車など日常の安全意識の低い学生は防災意識も低くなる傾向がみられた。教員の安全意識や防災意識は、日常的に子ども達の生命を守る根幹にあり、防災教育の具体的指針を作成することは重要である。今後、想定されている事故や自然災害にむけ、近畿教員養成系大学が連携して、防災教育に取り組むようなシ

システムの構築が急務であると考えられた。

2-8 中学校における災害弱者の避難時の困難に関する研究—外交籍、支援籍生徒への聞き取り調査から—（吉田かえで 他）

外国籍や支援籍生徒の災害時の緊急避難に関して対面式の聞き取り調査を行い、安全な避難誘導のための問題点を検討し報告された。支援籍生徒は避難訓練時の集団避難に危険体験や不安を訴え、教員や介助員による他助が必要であると報告された。一方、外国籍生徒は、訓練時に言語による困難はなく、緊急避難時の内容を理解するより、他の生徒の動向から対応できるようなのである。緊急避難時は、全員が安全に避難することが前提であり、避難弱者には、より多くの避難訓練を経験させることが必要ではないかと考えられた。本研究は、避難弱者の観点から避難誘導に関する問題点を指摘した貴重な報告であったが、今後は、これらの知見をもとに具体的な避難弱者のための緊急時の避難マニュアルの作成を提示されることを期待している。

第3会場

<依存>

座長 森岡郁晴（和歌山県立医科大学）

3-1 中学生における携帯電話の使用状況と携帯依存との関連について（川村小千代 他）

中学生 425 名のうち、スマートフォンを使う者 176 名と従来型携帯電話を使う者 71 名を対象に、携帯電話の使用状況と携帯依存度の関係を検討した結果、スマートフォン使用者は携帯依存度が高かった。また、2 年以上使用している者、起床時や食事中に使用している者で、携帯依存度が高かったとの報告であった。中学生がスマートフォンの依存に陥りやすい背景、またその対策についての質問があった。ますますスマートフォンの使用が増えることから、管理する方向以外の対策や支援の検討が望まれる。

3-2 中学生におけるインターネット依存と睡眠習慣との関連（大平雅子 他）

中学生 310 名にインターネット依存度テスト

を実施し、因子分析した結果、コントロール障害と逃避行動の 2 要因が抽出された。これらの 2 要因は、ピッツバーグ睡眠質問票による熟睡感と日中のやる気と関連していたことから、情報教育に正しい利用方法の視点を取り入れることが重要であるとの報告であった。学年による睡眠の質の違い、インターネットの使用割合についての質問があった。インターネットが普及し依存度が高い中学生の出現が危惧されることから、より効果的な教育、それに加えて教育方法の工夫が望まれる。

3-3 「週刊タバコの正体」の配布を通じて

（奥田恭久）

毎週、タバコの有害性、ニコチン依存症、喫煙とがんとの関係などを、「週刊タバコの正体」と題したリーフレットにまとめ、それを高校生に配布する活動を 10 年間行ってきたところ、「タバコを吸うのはカッコ悪い」と思う生徒、「一生、タバコを吸わない」と考える生徒が増加したとの報告であった。内容をどのように工夫しているのか、保護者への配慮についての質問があった。高校生の喫煙率が低下しているが、このような教育が将来の喫煙を防ぐことから、今後も継続的な活動が望まれる。

3-4 「禁煙・予防と治療」～最初の一本に手をつけさせないための和歌山禁煙教育ボランティアの取り組み～（玉置敬一 他）

喫煙による害についての真実を、繰り返し伝えるために、2003 年から小学生を対象に授業を行っている和歌山禁煙教育ボランティアの活動が、和歌山市の全小学校から次第に増え、対象も高学年から低学年に広がっているとともに、それが養護教諭からの賛同を得られているとの報告であった。小学生に授業を実施するための工夫についての質問があった。ニコチン依存は最初の一本で起こる者もいることから、このような教育が将来のニコチン依存を防ぐことにつながることを期待され、今後も継続的な活動が望まれる。

<教職員 等>

座長 沼田守弘（奈良県教育委員会）

**3-5 未成年者への禁煙支援成果の文献的考察
（岡田寿美 他）**

Cochrane Database Systematic Rev. 2013 を用いて未成年者への禁煙支援方法別に文献的考察を実施した報告である。有効な支援法としては、行動変容ステージモデルに基づく社会心理的支援や、PC やネットなどの IT 技術を用いた支援が含まれ、薬物療法は規模が小さく成功率も低く有効性は示されなかったとのことであった。日本では薬物療法による未成年者への禁煙治療例が実施されており、今後の集積が待たれる。

3-6 複数配置校の養護教諭同士の人間関係とその課題（宮慶美恵子）

養護教諭の複数配置に関しては、養護教諭同士の人間関係の問題や職務分担の問題が指摘されていることから、全国 20 の政令指定都市の複数配置校・養護教諭 704 名に無記名の自記式質問紙調査を実施した結果の報告である。313 名から回答が得られ（回収率 44.5%）複数配置の養護教諭同士の半数が、二人の関係がうまくいかなかった経験をしていたことが報告された。一方、複数配置を長く経験した者や養護教諭経験が長い者との組み合わせが仕事を円滑に進めることが示唆されたことなど、複数配置が養護教諭にとって益となる方策を考える上での重要な報告であった。

3-7 教職員の疲労と睡眠の客観的評価

（大川尚子 他）

疲労度を客観的に評価できる検診システムを用いて教職員 241 名を健常者 53 名と比較した緻密な調査であった。教職員群に慢性的な疲労や自律神経機能異常、覚醒時における活動量の低下がみられ、メンタルヘルス障害や身体疾患の要因となる可能性が考えられたことが報告された。今後の研究継続により教職員の疲労軽減につながる内容であった。

3-8 自主的研修参加による養護教諭の自己効**力感への影響職務経験年数の比較を通して**

（古角好美）

研修会に自主的に参加した 76 名の養護教諭を対象に、研修内容が自己効力感に与える影響を職務経験年数ごとに比較検討した結果、職務年数により異なっていることが示され、職務年数を踏まえた研修内容の構築やプログラムづくり等が重要であると示唆された。

第 4 会場**<ライフスキル 等>**

座長 吉岡隆之（奈良学園大学）

4-1 キャリア教育におけるライフスキル関連能力とライフスキルとの関連（齋藤昌子 他）

義務教育レベルの「キャリア教育」における「ライフキャリア能力」を「ライフスキル関連能力」と定義し、A 県の小学校における「キャリア教育の実践の手引き」における「ライフスキル関連能力（意思決定力、自己理解力、コミュニケーション力）」の系統性について分析した研究である。具体的には、各能力目標に関する表現（能力表限）を学年別に分析した結果、一部を除き、能力表現が類似している題材が多く、系統性という点で十分とは言えないという結論であった。今後、全国的なレベルでの「キャリア教育」の系統性についての検討や、既に系統性のある「ライフスキル教育」を「キャリア教育」に応用する研究に期待したい。

4-2 着衣の上から行うタッチケアの効果（1）

（小島賢子 他）

日常生活の中で簡便に実施できる「着衣の上から座位で行うタッチケア」を成人男女 40 名に行い、自律神経活動（自律神経機能測定器による）、ストレス（唾液アミラーゼモニターによる）及び心理的側面（一時的気分尺度による）を実施前後で比較した研究である。自律神経活動指標のうち「心拍数」「CVRR 値（副交感神経支配が反映）」、一時的気分尺度のうち「緊張」「抑うつ」「混乱」「疲労」が実施後に有意に低くなり、特に心理面に対して効果的であることが明確になったということであった。今回は成人を対象と

した効果検証であったが、今後、学校現場における意義や効果についての検討が望まれる。

4-3 養護教諭と養護教諭養成課程の学生のおしゃれ障害に関する意識調査（田食隆子 他）

近年、増加しつつある学齢期の子どもの「おしゃれによる健康被害（おしゃれ障害）」について、保健指導を担う養護教諭を対象に意識調査を行った研究である。小・中学校・高等学校の養護教諭6名へのフォーカス・グループ・インタビュー（FGI）において、「おしゃれ障害」は中学校及び高等学校に多く、特に都市部に集中しており、また、中学生以降でおしゃれ行為が多く確認されたということであった。おしゃれの多様化、低年齢化が進む一方、子どもたちの「おしゃれ障害」に関する研究は少なく、今後、さらに詳細で広範な研究に期待したい。

4-4 女子高校生の初経・月経の実態

（井手りか 他）

最近の女子高校生の月経の実態や月経に関する悩みについて、女子高校生623名を対象に無記名で自記式質問紙調査を行った研究である。

「初経を迎えた時の気持ち」として否定的な感情が肯定的な感情の3.7倍多く、「初経を告げた相手（約9割は母）の反応」として否定的反応が肯定的反応を上回り、約6割が月経日を記録しておらず、約4割が月経に関する悩み（半数は月経痛）を抱えているなどの結果から、初経や月経に関する保健教育は、個々の生徒（場合によっては保護者）にタイムリーに行う必要があり、養護教諭が生徒の月経に関する悩みを真摯に受け止め対応していくことが大切であるという結論であった。子どもたちを取り巻く環境がめまぐるしく変化中、その変化に即応する対策が重要であり、本研究の成果をふまえた対策に期待したい。

<栄養 他>

座長 北口和美（近大姫路大学）

4-5 黒大豆の摂取によるPMSと月経痛の緩和に関する研究（岩屋里奈 他）

PMSは性成熟期女性に気分の変化や身体的不快感が見られる。本研究は女子大学生6名を対象に、1ヵ月基礎体温とPMSメジャー、次の1ヵ月は基礎体温、PMSメジャーと炒った黒大豆を15粒を湯で5分間蒸らした黒豆茶を1日1回黒豆と共に食し、PMSと月経痛の症状軽減効果を検討した。結果、「腰痛」「疲労」「下腹痛」「乳房の張り」等に80%以上効果が見られた。PMSデータの取り方、効果の根拠として黒豆成分を挙げているが、15粒の黒豆の成分構成が不明であり、レシチンの効果やイソフラボン量と女性ホルモンバランス等を科学的に明らかにすることが必要であるとの意見がでた。

4-6 中学校における保健体育科と連携した食健康教育の評価：中学3年生の結果より

（千須和直美 他）

食生活管理能力を身につけ、不健康な食行動の予防を目的として、大学が作成した教育プログラム（内容：生活習慣病、食事と健康、食事バランスのとり方）を保健体育科と連携して、中学3年生に4回授業を実施した。結果、食知識・態度、食生活改善に関する自己効力感に良好な変化が見られ、身体の状態維持、知識・態度・スキルを身につける点で効果がみられた。フロアから出た専門的な内容の授業であり保健体育科教員の指導援助の問題、得られた力を今後いかに継続させていくか等の意見を含め、今後のより効果的なプログラム開発を期待したい。

4-7 女子学生における獲得筋量と骨量・脂肪量及び生活習慣との関連—市販体組成計を用いた分析から—（間瀬知紀 他）

女子大学生110名を対象に市販体組成計から算出された四肢筋量を3群に分類し、筋量の獲得に影響を及ぼすと考えられる食行動・運動習慣等の生活習慣、獲得筋量と骨量・脂肪量及び体力との関連を検討した。結果、筋量の大小が体格、骨量及び体力に関連していた。獲得筋量が高い者はダイエット行動にも関連を示していたが、運動の意識が高く運動を習慣化している者の割合が高い傾向にあった。対象の年齢から適切な

身体活動により、筋量や骨量が変化(増加)することが考えられることから、筋量獲得と運動習慣と共に、女子大学生のサルコペニアや骨粗鬆等の認識との関連性についての検討も望まれる。

3. 特別講演報告

「伝えることと、伝わること ～ガッテン流・行動変容につながるプレゼン術～」

講師 北折一（元 NHK ためしてガッテン専任ディレクター）

高橋裕子（奈良女子大学）

的確な情報を実にわかりやすく伝え続けてきた NHK の看板番組「ためしてガッテン」。それを番組開始当初から作り続けてきた元専任ディレクターの北折一（きたおり はじめ）氏の話は、最初から最後まで「ガッテン」の連続であった。

「健康」はとても大切なものだから、「健康づくり」も当然、大切。にもかかわらず、みすみす病気になる道を選んで歩く人が後をたたないのはなぜでしょう？ その大きな理由は、これまでの指導が「健康づくりが大切なのは当然」を、前提にしすぎてきたから。ぼちぼちやめませんか、「正しいことをきちんと伝える健康教育」なんて。だって、そのやり方じゃあ結果が出せないことが、すでに明らかですよ？

これは氏の講演抄録の抜粋であるが、私たちが「伝えたいつもり」で「伝わっていない」ことをずばり、情報を伝え続けてきた立場で指摘しておられる。私たちが陥りやすい罠として「魔性（ましょう）の攻撃」も指摘された。「ちゃんと歯をみがきましょう」「ちゃんと手洗いうがいをしましょう」「栄養バランスを考えて食べましょう」これを北折氏は「…って、それそのまんま伝えてどーするんですか？」氏が何よりも重視するのは、相手の行動を変えること。伝えるからには相手が行動を変えるような伝え方をすることが大事であり、「〇〇しましょう」という形では伝わらないし行動も変わらない。

ではどうやって？氏が伝える「確実に伝えるためのワザ」および「知識を行動に移してもらうためのポイント」は非常に平明で实际的である。相手の「共感」を得て「お得感」「お得感の予感」

を持てるようにする。水曜夜8時という視聴率の超激戦区で18年にわたり番組を作り続け、ヒット番組としつづけた中で得てきた確信を的確に伝授いただいた。

4. 教育講演報告

「世界で一番聞きたい保健指導&健康教育論」

講師 岡崎好秀（モンゴル医科大学教授）

高橋裕子（奈良女子大学）

小児歯科の専門医であり、動物の歯の話しか健康の話まで幅広い話題で学校現場での講演が非常に多い岡崎先生の話のテーマは、「どの様に人に話をすれば、よくわかってもらえるだろう？」「どの様に話を展開すれば聞いてもらえるのだろうか？」。

そのポイントは” 具体的” で,” おもしろい” 話をすること。” 子どもだから” ではなく,” 子どもだからこそ” という発想が重要であり、北風型ではなく太陽型指導を重要視することであった。「シルベスター・スタローンの驚くべき秘密」「野生のサル、すいかで最初に食べるのは？」などのクイズを交えながら、あつという間の30分、まさに明日からさっそくに「楽しくて役に立つ」教育講演であった。

5. 平成 27 年度近畿学校保健学会奨励賞

選考委員会による審査の結果、次の者が平成27年度近畿学校保健学会奨励賞として採択された。

遠藤 朝（尼崎市立成文小学校）

演題：経験年数の少ない小学校教員における職務ストレスとストレス反応の関連
（抄録は P13 に掲載）

6. 学会印象記

上田光枝（奈良教育大学附属小学校）

第62回近畿学校保健学会に参加し、たくさんのことを学び、たくさんの刺激を得ました。学会には大学の先生方、学生の方、養護教諭以外にも様々な職種の方々が参加されていて、それぞれのお立場からの多面的なご意見を聞くことができました。

午前の演題発表では、養護実習や複数配置の課題、研修など、養護教諭の職務に直接関わる内容も多く、「防災」「禁煙」「暴力」など多様なテーマでの発表があり、直接聞くことができなかった演題も講演集を読ませていただくことで、新たな視点からのとりくみを知り視野が広がりました。また、ランチョンセミナーと午後の講演では、「伝える」「伝わる」をテーマに3人の先生方から大変興味深いお話を聴くことができました。これまで保健指導や「ほけんだより」を通じて子どもたちや保護者の方に伝えていたことは、本当に伝わっていたのか。自分のとりくみをふり返り、反省する機会となりました。どうしたら伝わるかという具体的なヒントもいただけたので、早速今後のとりくみに生かしていきたいと思っています。

近畿学校保健学会には2回目の参加でしたが、学校保健に関わる様々な職種や立場から意見を出し合うことの大切さを改めて感じました。子どもたち健やかな成長のために、今何が大事か、今自分ができることは何か、常に課題意識を持ち、研究や実践に学びながら日々とりくんでいく意欲がわきました。こうした学会の魅力をより多くの養護教諭の先生方にも伝えて、ともに学びあっていければと思います。

遠藤 朝（尼崎市立成文小学校）

今回、小学校教員になって初めての学会参加となりました。学校現場の実態とすり合わせながら、学校保健に関する様々な問題を取り上げた発表を聞き、これまで以上に関心が深まりました。また、特別講演では、伝える側の工夫や考え方の変換によって、ただ相手に「伝える」ことから、相手に「伝わる」ことになるといった、貴重なお話も聞くことができました。日々の学校生活を送る中で、子どもたちを一番近くで見ている学級担任として、子どもに伝えるべきことが本当に伝わっているのだろうか、子どもの心の声に寄り添い、サポートできているのだろうか、といった事を改めて考えさせられました。そして、今後、自分のできることは何かを考える良い機会となりました。

私自身は、経験年数の少ない教員の職務ストレスについて発表させていただきました。様々な経験をお持ちである先生方から、多角的な視点からご意見やアドバイスをいただくことができ、非常に有意義な時間となりました。また、お忙しい中、研究に協力してくださった先生方にお礼申し上げますとともに、学会奨励賞という素晴らしい賞までいただけたことに心から感謝申し上げます。

学会に参加する度に、新しい知識や考えに出会い、自分自身の興味の幅が広がったり、今後の学びにつなげられたりすることが魅力だと感じます。今後も学校教員の立場として研究に携わり、人に「伝わる」ような発信をしていきたいと思っています。

川崎 詔子（追手門学院中・高等学校）

私は現在、私立の中高等学校保健室に勤務しています。大学の保健室に約30年間勤務していましたが、昨年11月に系列校である現任校に異動しました。大学勤務時代は、保健師（行政職）として保健室業務を担当しましたが、中高保健室は養護教諭（教員）を兼任する形での勤務をしています。同じ保健室という名前の職場でも、場所や対応年齢、職種、保健室機能や有り方そのものに大きな違いがあり、戸惑いながら日々勤務していました。このような状況で、今回初めて近畿学校保健学会に参加させていただきましたが、よく準備されており、内容も全体的によかったと思います。

まず午前中の分科会ですが、第3会場に参加しました。まず、日々お忙しく業務をされている会の皆様ですが、演者の先生方がたくさんいらっしゃることに感心しました。大学院を卒業してから、とくに現任校に赴任してからは研究ということに遠ざかっていましたので、よい刺激をいただきました。また、演者の先生方だけではなく、フロアの先生方のご意見などからもたくさんの情報を得ることができました。複数勤務の問題などは、私的にタイムリーな話題で非常に参考になりました。

次に午後からの高橋先生のランチョンセミナ

一ですが、わかりやすい講演であったこともですが、なにより先生の健康指導に対する熱い思いを感じ、明日から働くための勇気をいただきました。おいしいお弁当をいただきながら、リラックスした状態で聞かせていただくことができました。

さらに北折先生、岡崎先生のご講演では、健康教育の考え方やきちんとした根拠に基づいた詳細かつ具体的な指導方法を教えていただくことで、健康教育の専門家としての引き出しがたくさん増えたと感じております。そして会に参加したことで一番よかったことは、かつて一緒に働いた方々との思いがけない再会です。彼女たちと一緒に学ぶきっかけと場所を提供していただいたことに感謝しております。この場をお借りして、第62回近畿学校保健学会長である高橋先生をはじめ理事の先生方、スタッフの方々に御礼を申し上げ、会の感想とさせていただきます。有り難うございました。

福井恵美子（当日会員）

この度、第62回近畿学校保健学会に参加させていただいたことに、深く感謝いたします。「必要な情報がちゃんと伝わること」・・・これは、日頃、健康に関しての「伝えたい情報・伝えるべき情報」をいかに、「伝わる情報」として発信していくべきかに苦慮し悶々としながら活動している私にとっては、「永遠の課題」です。

重要な情報であっても、ちゃんと伝わらなければ、意味がない・・・そう思いつつ、試行錯誤しながら、日々の活動を行っている私にとっては、今回の学会のプログラムの講師陣のお名前を見たときに、正直、目を疑いました。「北折先生」、

「岡崎先生」・・・ともに数々の著書などを拝見し、その情報発信力、情報伝達力のすごさに恐れおののくような、まさに、「情報伝達の“神”」のような存在のお二人が、講師名に上がっている。著名すぎるお二人による、“垂涎”の「テーマ」。「こんな“夢”のような、“お得”な講演会があつていいの？」という感じで、即座に参加申し込みさせていただきました。当日は、すでに午前中、仕事の予定が入っていて、「先生方の講演に遅れな

いか」、それだけが気がかりで、ひたすら、その日を楽しみに待ちました。

午前中の仕事を終え、急いで向かったものの、渋滞などがあり、すでにランチョンセミナーが終わったところで到着しました。受付をすると、ランチョンセミナーに参加できなかった私に対して、受付の方が、「お疲れ様です。お弁当、いかがですか？」と言って下さり、お弁当をくださいました。そのお心遣いのありがたさに加えて、そのお弁当が実においしく豪華で、本当に“お得”すぎて、申し訳なく思いました。

会場は、大きな会場でしたが、参加者の多さに驚きました。学校保健の現場でも「伝わる情報提供」のあり方が大きな課題であることを再認識しました。そして、いよいよ、お二人の講演会・・・気が付けば、閉会式・・・まさに、怒涛のような「午後のひととき」でした。

健康格差の拡大が社会的な課題となっている状況の中、無関心期の人たちにこそ、適切な情報が伝わり、行動変容につながるよう、支援することが必要ですが、そのために必要なエッセンス（「考え方」と「スキル」）が、北折先生と岡崎先生のお二人のお話から、「スコール」のように降り注ぎ、私の「思考回路」も「心」も、「悶々感」が払拭され、「やる気満々感」で、満たされました。「伝わる」ための「キーワード」は「受け手の能動性」であり、それを、ひきだせる「仕掛け、戦略」を、こちらがどれだけ用意し、仕組めるか、その「具体例」を、多角的に、お二人の先生からの講演で実演していただいたように思います。

その結果として、私自身の「伝える」ことへのモチベーションは飛躍的に上がりましたし、私自身の日常業務における「伝え方の見直し」という行動変容につながっています。

この学会は、私自身の身を持って、「伝わることの成果」を体験させていただいた、貴重な、貴重な学会であったと思います。このような、通常、ありえないような豪華な講師陣を揃えていただき、受付の方を含めて、参加者に対して、限りなく優しく、お得感この上ない機会をあたえていただいたことに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

平成27年度近畿学校保健学会奨励賞

経験年数の少ない小学校教員における職務ストレスとストレス反応の関連

○遠藤朝¹⁾、宮井信行²⁾、森岡郁晴²⁾、白石龍生³⁾、武田眞太郎⁴⁾、宮下和久⁴⁾

1) 尼崎市立成文小学校、2) 和歌山県立医科大学大学院保健看護学研究科、

3) 大阪教育大学、4) 和歌山県立医科大学医学部衛生学教室

キーワード： 小学校教員、職務ストレス、ストレス反応

【はじめに】近年、学校教員においてうつ病や適応障害などの精神疾患による休職者が増加しており、その背景には、教員の職業的特性や時代の変化に伴う役割の多様化などが関係しているとされている。また、このような状況の中で、新任教員の離職率の高さも問題視されており、経験年数の少ない教員のメンタルヘルス対策が喫緊の課題となっている。本研究では、教員歴10年目までの小学校教員を対象に、職業性ストレス簡易調査票を用いてストレス状態を調査するとともに、ストレス要因や周囲のサポートとの関連について検討を行った。

【対象と方法】公立小学校に勤務する教員のうち、教員歴が10年以内である270名を対象に、無記名の自記式質問紙調査を郵送法で実施した。調査は平成26年5～6月に実施し、回収数は159、有効回答数は136(有効回答率50.3%)であった。

ストレス状態の評価は、職業性ストレス簡易調査票を用いて、ストレス反応(9因子:29項目)、仕事のストレス要因(6因子:17項目)、周囲のサポート(4因子:11項目)を調査し、4件法(1～4点)の回答を合計して下位因子ごとの得点を算出した。また、ストレス反応については、各因子を標準化得点換算表に基づいて5段階評価し、「やや高い」「高い」に該当した場合を「陽性」と判定してその項目数を求めた。

統計解析にはSPSS ver.15.0Jを使用し、統計学的有意水準は5%とした。

【結果と考察】対象者の内訳は男性50名(36.8%)、女性86名(63.2%)で、年齢は25.7±3.3歳(22～35歳)であった。教員歴は3.2±2.4年(1～10年)で、このうち、3年未満の者(新任教員)は76名(55.9%)、3年以上の者(若手教員)は60名(44.1%)であった。

教員歴別にストレス反応の得点を比較すると(表)、新任教員は若手教員に比べて、「疲労感」「不安感」「抑うつ感」が高く、「活気」が低い傾向にあり、「不安感」では有意に高値であった($p<0.01$)。ストレス反応の陽性項目数は新任教員の方が多い傾向にあったが、有意な差は認められなかった(1.6±1.4個 vs. 1.2±1.5個 $p=0.17$, Cohen's $d=0.28$ 効果量:小)。

仕事のストレス要因を比較すると、新任教員は若手教員に比べて、「心理的負担(量)」「心理的負担(質)」「仕事のコントロール度」で得点が高く、「心理的負担(質)」では有意に高い値を示した($p<0.05$)。一方、若手教員では「職場の対人関係」「職場環境」の項目で高く、「職場環境」では新任教員との間に有意な差が認められた($p<0.05$)。また、周囲のサポートでは、「管理職」「家族・友人」では差がなかったが、

「先輩の教員」「同期・後輩の教員」においては、新任教員の方が若手教員よりも低い傾向にあった。

ストレス反応の陽性項目数を従属変数として回帰分析を行った結果、新任教員では、「働きがい」($\beta=0.45, p<0.001$)、「仕事の適性度」($\beta=0.31, p<0.01$)、「心理的負担(質)」($\beta=0.21, p<0.05$)で有意な関連が認められた。一方、若手教員では、「心理的負担(量)」($\beta=0.36, p<0.01$)、「職場の対人関係」($\beta=0.27, p<0.05$)、「仕事のコントロール度」($\beta=0.29, p<0.05$)、「職場環境」($\beta=0.24, p<0.05$)、「先輩の教員」($\beta=-0.23, p<0.05$)が関連していた。

【結論】新任教員は若手教員に比べて、不安感、疲労感、抑うつ感などの心理的ストレスの訴えが強い傾向にあった。また、若手教員では、職場の対人関係、仕事の量的負担感とコントロール度、先輩の教員からのサポートがストレス反応に関係したが、新任教員の場合は、働きがい、仕事の適性度や質的負担感がストレス反応を強める要因であった。したがって、経験年数の少ない教員の中でも、就職して間がない新任教員と数年の経験がある若手教員ではストレス反応に影響を与える要因が異なることが示唆された。

表. 教員歴別にみた職業性ストレス(ストレス反応・仕事のストレス要因・周囲のサポート)の状況

	新任教員 (n=76)	若手教員 (n=60)
<u>ストレス反応</u>		
活気	7.0 ± 2.3	7.3 ± 2.3
イライラ感	5.9 ± 2.4	5.9 ± 2.1
疲労感	7.9 ± 2.2	7.5 ± 2.2
不安感	7.5 ± 2.5**	6.3 ± 2.1
抑うつ感	9.7 ± 4.0	9.3 ± 3.0
身体愁訴	17.0 ± 4.9	16.9 ± 4.0
<u>仕事のストレス要因</u>		
心理的負担(量)	10.2 ± 1.9	9.8 ± 1.9
心理的負担(質)	9.8 ± 1.7*	9.0 ± 2.0
身体的負担	3.4 ± 0.7	3.2 ± 0.7
職場の対人関係	4.9 ± 1.6	5.4 ± 1.8
職場環境	1.5 ± 0.7	1.8 ± 0.8*
仕事のコントロール度	7.7 ± 1.7	7.1 ± 1.8
技能の活用度	1.8 ± 0.7	1.7 ± 0.6
仕事の適性度	1.9 ± 0.7	1.8 ± 0.5
働きがい	1.2 ± 0.4	1.3 ± 0.5
<u>周囲のサポート</u>		
管理職	8.5 ± 2.0	8.5 ± 2.4
先輩の教員	9.7 ± 2.0	10.2 ± 1.7
同僚・後輩の教員	9.3 ± 2.3	9.8 ± 1.3
家族・友人	10.2 ± 1.9	10.4 ± 1.8

平均±標準偏差 * $p<0.05$, ** $p<0.01$

平成 27 年度近畿学校保健学会 評議員会・総会 報告

日時：平成 26 年 6 月 27 日（土曜日）13：20～
場所：奈良女子大学 N 棟 101 教室

議題

1. 平成 26 年度事業報告
2. 平成 26 年度決算報告及び会計監査報告
3. 平成 27 年度予算案
4. 第 63 回近畿学校保健学会 開催地・会長
開催地：滋賀県
学会長：高野知行先生（滋賀医科大学小児科）
5. 名誉会員の承認について
6. 第 4 回セミナーについて
7. その他

1. 平成 26 年度事業報告

- 1) 294 名（名誉会員 17 名を含む，平成 27 年 3 月 31 日現在）
- 2) 会議開催，学会通信など
 - ・平成 26 年 5 月 17 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
 - ・平成 26 年 6 月 1 日
近畿学校保健学会平成 26 年度会計監査
第 1 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：関西福祉科学大学）
 - ・平成 26 年 6 月 17 日
近畿学校保健学会通信 No.138 発行
 - ・平成 26 年 7 月 5 日
第 61 回近畿学校保健学会年次学会開催
（学会長 平田まり）
平成 26 年度評議員会及び総会開催
（於：関西福祉科学大学）
 - ・平成 26 年 9 月 6 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
 - ・平成 26 年 9 月 28 日
第 2 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：大阪教育大学）
 - ・平成 26 年 10 月 15 日

近畿学校保健学会通信 No.139 発行

- ・平成 26 年 12 月 13 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：兵庫教育大学神戸ハーバーランド
キャンパス）
- ・平成 26 年 12 月 13 日
第 3 回研修セミナー開催
（於：近畿厚生局麻薬取締部神戸分室）
- ・平成 27 年 1 月 25 日
近畿学校保健学会常任幹事会開催
（於：大阪教育大学）
- ・平成 27 年 2 月 1 日
第 3 回近畿学校保健学会幹事会開催
（於：大阪教育大学）
- ・平成 26 年 3 月 6 日
近畿学校保健学会通信 No.140 発行

近畿学校保健学会会員数

平成 27 年 3 月 31 日現在

所属	名誉会員	評議員	一般会員	計
滋賀県	2	16	21	39
京都府	5	22	17	44
大阪府	6	35	39	80
兵庫県	3	31	45	79
奈良県	1	10	7	18
和歌山県	0	14	20	34
計	17	128	149	294

	平成 23 年 3 月 31 日 現在	平成 24 年 3 月 31 日 現在	平成 25 年 3 月 31 日 現在
会員数	315	312	287
	平成 26 年 3 月 31 日 現在	平成 27 年 3 月 31 日 現在	
会員数	314	294	

名誉会員名簿（17名）

平成27年3月31日現在

年	氏名	所属
平成2年	安藤 格	大阪
平成8年	植村 良雄	滋賀
平成8年	米田 幸雄	京都
平成10年	出口 庄佑	奈良
平成14年	杉浦 守邦	京都
平成14年	玉井 太郎	大阪
平成15年	後藤 英二	大阪
平成16年	大山 良徳	大阪
平成16年	美崎 教正	兵庫
平成17年	近藤 文子	兵庫
平成22年	勝野 眞吾	兵庫
平成24年	小西 博喜	京都
平成24年	寺田 光世	京都
平成24年	八木 保	京都
平成26年	大矢 紀昭	滋賀
平成26年	堀内 康生	大阪
平成26年	三野 耕	大阪

3. 平成27年度予算案

【収入】				(-は不足)
	予算額	前年比	摘要	
会計収入	750,000	-60,000	会費@3000円×250人	
雑収入	0	0		
小計	750,000	-60,000		
前年度繰越金	389,497	23,498		
合計	1,139,497	-36,502		
【支出】				
	予算額	前年比	摘要	
印刷費	200,000	-100,000	学会通信(No.141~143)	
郵送費	90,000	0	学会通信等発送、振込手数料等	
事務費	20,000	0	学会通信送付簡代、文具代等	
人件費	80,000	-40,000	事務雇用費、会議交通費等	
会議費	20,000	0	常任幹事会 幹事会 (年3回)	
第4回研修セミナー	5,000	-20,000	手土産代	
年次学会補助金	150,000	0	滋賀・第63回事務局へ	
ホームページ維持費	100,000	0	年間契約 (カゲ作成費含む)	
選挙経費	100,000	100,000		
予備費	374,497	-1,502		
次年度繰越金	0	0		
合計	1,139,497	0		

2. 平成26年度決算報告及び会計監査報告

平成27年3月31日現在

【収入】				
	予算額	決算額	差額	摘要
会計収入	810,000	711,000	-99,000	会費@3000円×237人
第2回研修セミナー	25,000	10,000	-25,000	
雑収入	0	0	0	
前年度繰越金	365,999	365,999	0	
合計	1,200,999	1,076,999	-124,000	
【支出】				
	予算額	決算額	差額	摘要
印刷費	300,000	180,800	-119,200	学会通信(No.138~140)
郵送費	90,000	86,338	-3,662	学会通信発送、振込手数料等
事務費	20,000	75,289	55,289	学会通信送付簡代、名簿ソフト代等
人件費	120,000	80,725	-39,275	事務雇用費、会議交通費等
会議費	20,000	22,550	2,550	常任幹事会 幹事会 (年3回)
第3回研修セミナー	25,000	3,240	-21,760	手土産代
年次学会補助金	150,000	150,000	0	奈良・62回事務局へ
ホームページ維持費	100,000	88,560	-11,440	年間契約 (カゲ作成費含む)
予備費	375,999	0	-375,999	
小計	1,200,999	687,502	-513,467	
次年度繰越金		389,497	389,497	
合計	1,200,999	1,076,999	-124,000	

上記の通り相違ありません。

平成27年4月25日

監事 宮井信行

監事 高田恵美子

平成 27 年度

第 1 回近畿学校保健学会幹事会議事録

日時：平成 27 年 5 月 16 日（土曜日）

14:00～16:00

場所：奈良女子大学 N 棟 N201 講義室

出席者：【幹事長】白石

【常任幹事】後和，鬼頭

【幹事】（滋賀）板持，高野

（京都）井上，下村，藤原

（大阪）北口，楠本，平田，吉岡

（兵庫）川畑，西岡，中村

（奈良）辻井，高橋

（和歌山）武田

【監事】高田

（計 19 名敬称略・順不同）

欠席者：谷川，守谷，大川，大平，春木，笠次，

宮下，森岡（計 8 名敬称略・順不同）

議 題：

1. 前回議事録の承認について

幹事長より第3回幹事会議事録の確認がなされ、承認された。

2. 平成 26 年度会計報告および監査について

高田幹事から監査報告があった。適正に会計処理がなされていることが報告され、承認された。

3. 平成 27 年度予算案について

年次学会への補助金について白石幹事長から報告があった。前回の幹事会で了承された補助金増額が、決算報告をから見て不可能と判断されたことの説明があった。学会運営上やむを得ないという判断が得られた。第2回幹事会報告の中で増額の件が記載されていることを踏まえて、学会通信 No141 号に訂正文を幹事長名で掲載することが決まった。予算案が了承され、評議員会および総会に諮られることになった。

4. 平成 26 年度事業報告について

後和常任幹事から報告がなされ、了承された。

5. 第 62 回近畿学校保健学会について

高橋裕子学会長から詳細な報告がなされた。三浦事務局長からも補足説明があり、了承された。

6. 名誉会員の推薦について

奈良県地区代表幹事である辻井先生から報告があり、全会一致で奈良女子大学名誉教授山本公弘先生を名誉会員として推戴することが決まった。評議員会および総会に諮られることになった。

7. 評議員会および総会の運営について

例年通り進行し、司会は前回の年次学会長関西福祉科学大学の平田先生に依頼することで、了承された。

8. 次期年次学会（第 63 回近畿学校保健学会）

開催地および会長について

平成 28 年度の年次学会長高野知行先生より、開催の挨拶があった。開催日は下記のとおりである。

開催日：6 月 25 日（土曜日）

開催地：滋賀県

学会長：高野知行先生（滋賀医科大学）

9. 評議員会及び総会資料について

幹事長より説明があり、会務および予算・決算、選挙結果については資料を配布し、その他の項目については、パワーポイントで説明することとし、了承された。

報 告：

1. 学会通信 No141 号の内容について

後和常任幹事から報告があり、第 62 回年次学会のプログラムが中心となることが提案された。

2. その他

特になかった。

平成 26, 27 年度幹事及び評議員 (▲は幹事, △は監事)

平成 27 年 6 月 27 日現在

滋賀県

幹事定数 3 評議員定数 17 (欠員 1)

▲ 板持 紘子	元 滋賀大学教育学部附属中学校	龍田 直子	大津市総合保健センター
大迫 芳孝	滋賀県薬剤師会	▲ 谷川 尚己	びわこ成蹊スポーツ大学
大平 雅子	滋賀大学教育学部	地海 和美	栗東市立治田東小学校
木村 誠	木村歯科医院	中川 雅生	滋賀医科大学
小西 眞	小西医院	中野 一枝	滋賀県薬剤師会
志村 美好	大津市立真野中学校	野村 康之	のむら小児科
住吉 由加	滋賀県教育委員会	播磨谷 澄子	大津市立仰木小学校
▲ 高野 知行	滋賀医科大学	藤居 正博	滋賀県歯科医師会

京都府

幹事定数 4 評議員定数 22

浅井 千恵子	花園大学	▲ 下村 雅昭	京都女子大学
足達 哲也	神戸大学学術研究推進本部	谷水 亜紀	京都市立向島小学校
市木 美知子	京都女子大学	畑佐 泰子	大阪成蹊大学
▲ 井上 文夫	京都教育大学	平塚 靖規	京都府歯科医師会
上田 裕司	京都市立九条中学校	▲ 藤原 寛	京都府立医科大学
江崙 和子	園田学園女子大学	松原 周信	京都府立大学
長村 吉朗	京都市学校医会	村上 元良	京都府中丹教育局
片山 由美	花園大学	森 洋一	京都府医師会
奥村 正治	京都市学校医会	▲ 守谷 まさ子	京都府学校薬剤師会
久保 真依子	平安女学院中学校・高等学校	山内 雄貴	京都教育大学大学院
笹山 哲	京都大学医学部	山崎 陽司	京都府歯科医師会

大阪府

幹事定数 7 評議員定数 38 (欠員 3)

上野 奈初美	小田原短期大学	仲田 秀臣	大阪産業大学
宇佐見 美佳	羽衣国際大学	中西 増代	大阪産業大学
江原 悦子	元 大教大附属池田小学校	永濱 明子	立命館大学
▲ 大川 尚子	関西福祉科学大学	灘 英世	関西大学
大野 太郎	大阪人間科学大学	▲ 平田 まり	関西福祉科学大学
岡崎 延之	元 大阪女子短期大学	藤井 眞喜子	大阪府立貝塚高等学校
▲ 北口 和美	近大姫路大学	藤田 大輔	大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター
▲ 楠本 久美子	四天王寺大学	藤田 裕規	近畿大学医学部
甲田 勝康	近畿大学医学部	藤本 正三	医療法人藤本医院
古角 好美	大和大学	古田 敬子	大阪女子短期大学
小島 美幸	大阪市立西船場小学校	保科 寛	大阪府学校薬剤師会
児玉 広子	大阪府学校薬剤師会	松永 かおり	大阪市立御幸森小学校
小西 俊子	元 関西女子短期大学	三上 真美	大阪市立平野南小学校
▲ 後和 美朝	大阪国際大学	宮本 文子	元 太成学院大学
嶋田 博	関西女子短期大学	森口 久子	森口医院
▲ 白石 龍生	大阪教育大学	山口 統彦	近畿中央病院
高井 聡美	元 関西女子短期大学	▲ 吉岡 隆之	奈良学園大学
千須和 直美	大阪市立大学		

兵庫県**幹事定数 6 評議員定数 31**

足立 節江	丹波市立青垣中学校	中井 久純	神戸国際大学
五十嵐 裕子	元 園田学園女子大学	永井 純子	福山平成大学
出井 梨枝	元 園田学園女子大学 ▲	中村 晴信	神戸大学
今井 佳代子	兵庫県立大学附属高等学校 ▲	西岡 伸紀	兵庫教育大学
今出 友紀子	神戸大学	長谷川 ちゆ子	湊川短期大学
▲ 大平 曜子	兵庫大学 ▲	春木 敏	大阪市立大学
小原 久未子	神戸大学	菱田 一哉	神戸大学
▲ 川畑 徹朗	神戸大学	百元 三記	神戸大学附属明石中学校
▲ 鬼頭 英明	兵庫教育大学	間瀬 知紀	京都聖母学院短期大学
小池 理平	姫路市総合教育センター	松本 容史子	篠山市立味間認定こども園
香田 由美	福岡県立門司学園高等学校	森脇 裕美子	姫路独協大学
國土 将平	神戸大学	横尾 能範	神戸大学名誉教授
堺 千紘	神戸大学	吉田 順子	元 明石市立人丸小学校
嶋津 裕子	兵庫大学	李 美錦	神戸大学
高内 正子	関西学院大学	脇本 景子	宝塚市立山手台小学校
忠井 俊明	明石市立市民病院		

奈良県**幹事定数 3 評議員定数 11 (欠員 1)**

上田 光枝	奈良教育大学附属小学校	△ 高田 恵美子	関西女子短期大学
岡本 啓子	畿央大学	▲ 高橋 裕子	奈良女子大学保健管理センター
▲ 笠次 良爾	奈良教育大学	▲ 辻井 啓之	奈良教育大学保健センター
北村 翰男	奈良漢方治療研究所	中谷 昭	奈良教育大学
北村 陽英	奈良教育大学名誉教授	山本 公弘	奈良女子大学名誉教授

和歌山県**幹事定数 3 評議員定数 14**

有田 幹雄	和歌山県立医科大学名誉教授	永井 尚子	和歌山市保健所
内海 みよ子	和歌山県立医科大学保健看護学部	前馬 理恵	和歌山県立医科大学保健看護学部
黒田 基嗣	和歌山県立医科大学医学部	松本 健治	鳥取大学名誉教授
竹下 達也	和歌山県立医科大学医学部	△ 宮井 信行	和歌山県立医科大学保健看護学部
▲ 武田 眞太郎	和歌山県立医科大学名誉教授	▲ 宮下 和久	和歌山県立医科大学医学部
竹村 重輝	和歌山県立医科大学医学部	▲ 森岡 郁晴	和歌山県立医科大学保健看護学部
辻 あさみ	和歌山県立医科大学保健看護学部	吉益 光一	和歌山県立医科大学医学部

平成 27 年度

第 1 回選挙管理委員会議事録

日時：平成 27 年 9 月 26 日（土曜日）

16:00～17:00

場所：大阪教育大学天王寺キャンパス

西館第 1 会議室

1. 選挙委員会委員長の選出

委員長は互選により以下のように決定した。

選挙管理委員長：辻井啓之（奈良）

選挙管理委員：谷川尚己（滋賀）

藤原 寛（京都）

楠本久美子（大阪）

大平曜子（兵庫）

宮下和久（和歌山）

なお、滋賀県は板持紘子氏が代理出席した。

2. 選挙日程

選挙日程は下記のように決定した。

- ・1 月 31 日（日）11 時～（関西福祉科学大学）

第 2 回選挙管理委員会

幹事および評議員選挙投票用紙の送付

- ・2 月 3 日（水）～2 月 12 日（金）

幹事および評議員選挙投票期間

- ・2 月 21 日（日）13 時～（関西福祉科学大学）

第 3 回選挙管理委員

開票および当選通知の送付

- ・2 月 22 日（月）～2 月 26 日（金）

当選通知の確認期間

3. 選挙名簿の確認

- ・所属府県変更希望は年末までに行うように学会員に学会通信で依頼することとなった。
- ・名簿の確認は、各地区の代表幹事へ現時点の会費納入状況を記した名簿を送付し、11 月中に個別に連絡して会費の納入を促して頂くこととなった。
- ・3 名の退会者（滋賀 2 名、京都 1 名）について報告された。
- ・第 62 回年次学会（奈良）の参加時に会費を納入され、入会意思を示されたにもかかわらず、受付時に住所、所属等がきちんと確認されていなかった方、近畿の 6 府県以外の方に関しては、現時点では便宜上奈良の所属とすることとなった。

4. その他

- ・幹事、評議員とも得票数の上位から選出し、得票数が同点の場合は抽選により選出することとなった。
- ・開票時点で次点として 3 名程度選出し、辞退者が出た場合、次点の上位者から順次当選を通知することとなった。
- ・当選の通知方法は、まず幹事の当選通知を行い、辞退者からの連絡を経て幹事確定後に評議員への当選通知を行うこととなった。
- ・投票用（料金後納郵便）について、「投票用紙」の前に“幹事・評議員”の文言を追加することとなった。

役員選挙に関するお願い

今年度は役員改選の年度になります。今回の選挙より評議員の任期は 3 年となり、評議員選挙での得票数の上位から幹事が選出されます。したがって、従来行っていた評議員による幹事選挙がなくなりましたので、ご注意ください。

なお、選挙に先立ち、選挙人名簿と被選挙人名簿を作成する必要があります。そのため、会員の方でお名前や所属府県の変更等がある場合は、12 月 31 日までに学会事務局までご連絡ください。

選挙管理委員長 辻井啓之

学会事務局メールアドレス：kinkigakkohokengakkai@yahoo.co.jp

第4回研修セミナー

テーマ ～ 麻薬取締の現場と教育をつなぐ ～

第3回研修セミナーでは「麻薬取締の現場と教育をつなぐ」をテーマに行われ、非会員を含めて30名の方に参加して頂きました。参加者のアンケート結果からも好評を得ただけでなく参加できなかった会員からの要望もあり、第4回研修セミナーについても同一テーマで実施することとなりました。

申し込み方法等の詳細は年次学会、学会通信等でご連絡致しますので、奮ってご参加ください。

日時：平成27年12月12日（土曜日）午後2時～

研修先：近畿厚生局麻薬取締部神戸分室

〒650-0024 神戸市中央区海岸通29 神戸地方合同庁舎3階

（最寄駅：JR 三ノ宮駅、阪神三宮駅、阪急三宮駅より徒歩約15分）

定員：30名まで（先着順）

非会員の方の参加も歓迎しますので、学会入会の手続きをお願いします。参加希望の方は下記のアドレスまで「お名前、所属、連絡先（メールアドレス、お電話等）」をお送りください。

申込み先アドレス：kitohi17@hyogo-u.ac.jp

募集期間：11月1日～11月30日

*終了後、麻薬取締官との懇親会予定

（常任幹事 鬼頭英明）

編集後記

学会通信142号をお届けします。今回は6月27日に奈良女子大学で開催されました第62回近畿学校保健学会の開催報告が主となっています。高橋裕子学会長、三浦秀史事務局長、ご関係の皆様には貴重な機会をいただき本当にありがとうございました。参加された会員の皆様には充実した1日になられたことと思います。

今年も猛暑が続き、熱中症患者の発生が多く報告されました。また、集中豪雨、霰（あられ）、竜巻などの異常気象、それに伴う土砂災害、河川の決壊なども多く見られました。被害にあわれた方々に心よりお見舞い申し上げます。

さて、今年度役員選挙が実施され、評議員及び幹事が選出されます。平成27年度の会費を納入された方が選挙権を、平成25～27年度の会費を納入された方が被選挙権を有することになります。12月末の会費納入状況に基づいて選挙権者名簿、被選挙権者名簿を作成する予定です。会費未納の方はなるべく早めに会費を納入いただきようお願い申し上げます。

常任幹事 大川尚子